第三章　紫の君の物語　新手枕の物語

［第一段　源氏、紫の君と新手枕を交わす］

二条院には、方々払ひみがきて（隅々まで掃除して磨き上げていて）、男女（従者は男も女も）、待ちきこえたり（源氏の帰りをお待ち申していました）。上臈ども皆参う上りて（源氏のお帰りに側仕えの女房たちも皆出迎えに出て）、我も我もと装束き（我も我もと着飾り）、化粧じたるを見るにつけても（化粧していたのを御覧になって源氏は）、かの（後にした左大臣家で）ゐ並み屈じたりつるけしきどもぞ（居並んで項垂れていた女房たちの様子を）、あはれに思ひ出でられたまふ（傷ましく思い出していらっしゃいました）。

御装束たてまつり替へて（源氏は喪服から平服にお着替えなさって）、西の対に渡りたまへり（西の対にお渡りになった）。衣更えの御しつらひ（几帳や調度類を冬物に衣替えした部屋構えが）、くもりなくあざやかに見えて（すっきり揃って見えて）、よき若人童女の、形、姿めやすくととのへて、「少納言がもてなし（少納言の気配りは）、心もとなきところなう（行き届かない所が無くて）、心にくし（感心する）」と見たまふ（と御思いになる）。

姫君、いとうつくしうひきつくろひておはす（とても可愛らしく着飾って御出でです）。「久しかりつるほどに（久しぶりになるが）、いとこよなうこそ大人びたまひにけれ（また一段と大人びてきましたね）」とて（と言って源氏が）、小さき御几帳ひき上げて見たてまつりたまへば、うちそばみて笑ひたまへる御さま（恥ずかしげにうつむき加減ではにかむ姿は）、飽かぬところなし（申し分ない）。

「火影の御かたはらめ（火影に照る横顔や）、頭つきなど（額の生え際など）、ただ、かの心尽くしきこゆる人に（密かにお慕い申す中宮に）、違ふところなくなりゆくかな（そっくりになって行くようだ）」と見たまふに（と御覧になって）、いとうれし（とても嬉しい）。

近く寄りたまひて（源氏は姫の近くにお寄りになって）、おぼつかなかりつるほどのことどもなど（会えなくて気掛かりだった事などを）聞こえたまひて（御話しされて）、

「日ごろの物語（色々な出来事を）、のどかに聞こえまほしけれど（ゆっくり話してお聞かせしたいが）、忌ま忌ましうおぼえはべれば（忌みを落したいので）、しばし他方に（ことかたに、別の部屋で）やすらひて（休んでから）、参り来む（来る事にしましょう）。今は（これからは）、とだえなく見たてまつるべければ（いつでも会えますから）、厭はしうさへや思されむ（疎ましくさえ為るかもしれません）」

と、語らひきこえたまふを（姫にお話し申しなさるのを）、少納言はうれしと聞くものから（少納言は今は正式な妻はこの姫君だとほっとして聞いていながらも）、なほ危ふく思ひきこゆ（それでも源氏の浮気癖を疑っている様子でした）。

「やむごとなき（立派な身分の）忍び所（通い女と）多うかかづらひたまへれば（多く関係していらっしゃるので）、またわづらはしきや（また面倒な御方が）立ち代はりたまはむ（妻の地位に代わってお付きに成るかも知れない）」と思ふぞ（と思うとは）、憎き心なるや（気の回る事）。

御方に渡りたまひて（源氏は東の対に落ち着きなさると）、中将の君といふに（中将の君と言う女房に）、御足など参りすさびて（足などを摩らせなさって）、大殿籠もりぬ（御休みに為りました）。

朝には（そして翌朝には）、（大殿の）若君の御もとに御文たてまつりたまふ。あはれなる御返りを見たまふにも（源氏が去った寂しさを訴える乳母からの返事を御覧になると）、尽きせぬことどものみなむ（遣る瀬無い悲しみでいっぱいになる）。

いとつれづれに眺めがちなれど（ただ漫然と日を過ごしたが）、何となき御歩きも（気ままな女通いも）、もの憂く思しなられて（面倒で億劫に為って）、思しも立たれず（お出掛けを思い立たれない）。

姫君の、何ごともあらまほしう（万事に良く躾が）ととのひ果てて（行き届いて）、いとめでたうのみ（とても美しく）見えたまふを（お成りなので）、似げなからぬほどに（すっかり妻に相応しいまでに）、はた（既に成長していると）、見なしたまへれば（源氏は見做しなさって）、けしきばみたることなど（男女の色恋めいた話などを）、折々聞こえ試みたまへど（折に触れては持ち出してみても）、見も知りたまはぬけしきなり（意味がお分かりにならない様子でした）。

つれづれなるままに（埒の明かないままに）、ただこなたにて（ただ姫の居る西の対で）碁打ち、*偏つぎなどしつつ、日を暮らしたまふに、心ばへのらうらうじく（気立てが素直で）愛敬づき（嫌味が無く）、はかなき戯れごとのなかにも（一寸した不遜戯た仕草にも）、うつくしき筋をし出でたまへば（可愛らしさをお見せなさるので）、　*「偏継ぎ」は≪文字遊戯の一。漢字の旁（つくり）を示して、これに種々の偏を付けた文字を次々と考えさせ、行き詰まると負けになるもの。一説に「偏突き」の意で、詩句の中などの漢字の旁を見せて、その偏を当てさせるものという。≫（大辞泉）とある。

思し放ちたる年月こそ（幼過ぎて情交は無理で、成長を待つしかなかった時は）、たださるかたの（ただそうした）らうたさのみはありつれ（子供らしさだけで良かったが）、しのびがたくなりて（源氏はとうとう抑え切れなくなって）、心苦しけれど（言い難い事ながら）、いかがありけむ（何が在ったのか）、人のけぢめ見たてまつりわくべき（男女の区別を女房たちが考えて置かなければならない）御仲にもあらぬに（御仲でもない御二人の日頃の共寝で）、男君はとく起きたまひて（殿御は早くお起きに為ったのに）、女君はさらに起きたまはぬ朝あり（姐御は一向にお起きに為らない朝が御座いました）。

人びと（女房たちは）、「いかなれば（どうして）、かくおはしますならむ（こうして横になって御出でなのでしょう）。御心地の例ならず思さるるにや（御気分でも悪いのでしょうか）」と見たてまつり嘆くに（と拝し見て案じたが）、君は渡りたまふとて（源氏は東の対に渡り為さるという事で）、御硯の箱を（硯箱に伝言の書置きを認めて）、御帳のうちにさし入れておはしにけり（寝台の中に置いて行かれました）。

人まに(姫は人の居ない間に)からうして頭もたげたまへるに、引き結びたる文、御枕のもとにあり。何心もなく、ひき開けて見たまへば、

「あやなくも隔てけるかな夜をかさね、さすがに馴れし中の衣を」(和歌 9-22)

「心半ばのもどかしさ、思いを遂げた懐かしさ」(意訳 9-22)

と、書きすさびたまへるやうなり(書き流し為されたようでした)。「かかる御心おはすらむ(そういう御積りでいらした)」とは、かけても思し寄らざりしかば(姫は源氏の思惑を少しも思い寄らなかったので)、

「などてかう(なんであんな)心憂かりける御心を(猛りを向ける心算だった殿の恐ろしいお気持ちを)、うらなく頼もしきものに思ひきこえけむ(疑いも無く頼もしく思い申し上げて来てしまったのだろう)」と(と姫は)、あさましう思さる(悔しがりなさいます)。

昼つかた(昼になる頃)、渡りたまひて(源氏が西の対にお渡りになって)、「悩ましげにしたまふらむは(御加減が悪いそうですが)、いかなる御心地ぞ(どんな御気分ですか)。今日は、碁も打たで、さうざうしや(詰まりません)」とて、覗きたまへば、いよいよ御衣ひきかづきて(姫はますます着物を引き被って)臥したまへり(お隠れになる)。

人びとは(女房たちが)退きつつ(しりぞきつつ、姫から離れて)さぶらへば(控えたので)、寄りたまひて(源氏は枕元にお寄りになって)、

「など(なぜ)、かくいぶせき御もてなしぞ(そんな分からない真似を為さいます)。思ひのほかに心憂くこそおはしけれな(随分嫌って御出でなんですね)。人もいかにあやしと思ふらむ(女房たちも如何にか変に思うでしょう)」

とて、御衾(おんふすま、お布団)をひきやりたまへれば(を引き剥がしなさると)、汗におしひたして(姫は汗を掻いて)、額髪もいたう濡れたまへり(額髪も大分濡れて居らした)。

「あな、うたて(おや凄い)。これはいとゆゆしきわざぞよ(是は相当大変そうだ)」とて、よろづにこしらへ(慰め宥め言い訳を)きこえたまへど(申しなさったが)、まことに、いとつらしと思ひたまひて(姫は源氏の男臭さがとても情けなくて)、つゆの御いらへもしたまはず(一言もお返事なさいません)。

「よしよし。さらに見えたてまつらじ(もう何も申さぬ)。いと恥づかし(どうも弱った)」など怨じたまひて(などと源氏は恨み言を言いなさって)、御硯(おんすずり、硯箱を)開けて見たまへど、物もなければ(書付は無かったので)、「*若の御ありさまや(まだ子供だな)」と、らうたく見たてまつりたまひて(可愛く御思いに為って)、日一日(この日は一日中)、入りゐて(姫の寝所に側居して)、慰めきこえたまへど(慰め申されたが)、解けがたき御けしき(打ち解けない姫の御様子が)、いとどらうたげなり(ますます労しゅう御座いました)。　*手紙を見て返歌も考えず拗ねて泣いている、女の嗜みを備えていない子供の所業。どうやら姫は、一時的に極度の精神不安定に陥って自律神経の

変調かホルモンバランスの崩れかで発熱したらしい。しかし、側仕えの女房たちはこの姫の様子から昨夜の情交を窺い知ったわけでは無いだろう。この容態から原因までは計れない。源氏が東の対に出た後で、臥せる姫を気遣いながらも寝所の片付けはしたのだから、其処で全てを察したはずである。姫の精神不安定は殿の男臭さに驚いたと同時に、女房たちから聞かされていた男女の話と実際との違いへの戸惑いや、まるで床さばきが出来なかった事と其の全てを気取られたであろう羞恥と不安など、かなりなコンプレックスを抱えてはいたのかもしれない。何れにせよ、女房たちは姫の寝汗の原因はほぼ分かっていたが、治す手立ては持ち合わせていなかった、と言った所だったのだろう。だから無条件に下がって、処置を源氏に委ねた。ところで、この姫君との情交描写は皆無で、そのぼかし方も「人のけぢめ見たてまつりわくべき御仲にもあらぬに、男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬ朝あり」と言う徹底振り。今までの其れなりの濃厚な描写に比べて奇妙なほどだ。この時の姫は 14 歳と若いが、其れなりの描写の仕方はあるだろう。尤も、左大臣家の故姫との情交描写も無かったから、意外と肝心の所が省かれている感は何も此処だけでもない。ともあれ、処女膜出血が在ったのか、素股だったのか、女房の反応の記述もないが、実際に女房が気付かなかった事はありえない、と思っていたら、この後に続く風情ある描写の記述で惟光が祝言を察する場面があって、惟光が女房たちから其れなりの経緯を聞いていた事が窺い知れた。

［第二段　結婚の儀式の夜］

その*夜さり（いよいよその夜ともなると）、*亥の子餅（ゐのこもち、暦み餅で）参らせたり（子孫繁栄の祭日に託けて初夜の記念祝いを為さいました）。　*「よさり」の「さり」は、強調の副助詞「し」＋時間経過の動詞「あり」の短縮形で、＜正に夜という時分になって＞ということらしい。　*「陰暦十月の最初の亥の日亥の刻に、無病息災と子孫繁栄を祝って食べる餅。したがって、今、十月最初の亥の日の夜。紫の君との新枕の昨夜は戌の日の夜。」、との事。

かかる御思ひのほどなれば（忌明け直後の事なので）、ことことしきさまにはあらで（事改めた表立つ遣り方ではなく）、こなたばかりに（西の対だけに）、をかしげなる*桧破籠（ひわりご、折り詰）などばかりを、*色々にて参れるを見たまひて（数種類の餅を取り揃えたのをご覧になって）、君、南のかたに出でたまひて（源氏は南廂の間に御出になって）、惟光を召して、　*「ヒノキの白木の薄板で折り箱のように作り、中に仕切りを設け、かぶせ蓋（ぶた）にした容器。弁当箱として用いた。」、との事。*「いろいろ」とは、注に≪「亥の子餅」は、大豆・小豆・ささげ・胡麻・栗・柿・糖の七種類の粉で作るという。≫とある。

「この餅、かう数々に所狭きさまにはあらで（こう数多く詰め込む様にはしないで）、*明日の暮れに参らせよ（祝いの用意を整えよ）。*今日は忌ま忌ましき日なりけり（今日は日取りが良くないので）」　*「明日の夜は新婚三日目の夜に当たり、「三日夜の餅」を食べる風習。この餅は、白一色で作るという。」、との事。　*「陰陽道では、亥の日と巳の日を「重日」（じゅうにち）といい、事をなせば百事重なるといって忌んだ。」、との事。

と、うちほほ笑みてのたまふ御けしきを（含み笑いで仰る様子から）、心とき者にて（気が利く者なので）、ふと思ひ寄りぬ（直ぐ察しました）。惟光、たしかにも承らで（はっきりとした御用を承るまでも無く）、

「げに(確かに)、愛敬(あいぎゃう、慶び事)の初めは(の初祝いは)、日選りして聞こし召すべきことにこそ(日を選んで為さいませんと)。さても(ところで)、子の子は(ねのこ、亥の子祝いの翌日となる明日の祝い餅の数は)いくつか仕うまつらすべうはべらむ(どれ位ご用意いたせば宜しいでしょうか)」と、まめだちて申せば(真面目ぶって申せば)、

「三つが一つかにてもあらむかし(この三分の一も有れば良いだろう)」とのたまふに(と源氏がお答えになったので)、心得果てて(惟光は了解して)、立ちぬ(立ち去りました)。

「もの馴れのさまや(呑み込みが早い奴だ)」と君は思す。人にも言はで(惟光は人に言って用意させる事も無く)、手づからといふばかり(手作りといった風に)、里にてぞ(自分の家の者だけで)、作りゐたりける(祝い餅を作っていたのでした)。

君は、こしらへわびたまひて(姫を宥め倦ねて)、今はじめ盗みもて来たらむ(たった今この女を盗み出してきたばかりの)人の心地するも(者の気分がするのも)、いとをかしくて(却って新鮮味を覚えて)、

「年ごろあはれと思ひきこえつるは(この数年来と可愛がってお育てしてきた事など)、片端にも(かたはしにも、物の数では)あらざりけり(無かったという事だ)。人の心こそうたてあるものはあれ(人の気持ちの変わり様というものは分からないものだ)。今は一夜も隔てむことのわりなかるべきこと(今は一晩すら離れる事が耐えられないほど姫が恋しいのだから)」と思さる(と御思いなさいます)。

のたまひし餅(源氏がお言い付けなさった祝い餅を)、忍びて(ごく内密に)、いたう夜更かして持て参れり(大分夜更けてから惟光は持って参りました)。「少納言はおとなしくて(少納言は年配なので)、恥づかしくや思さむ(新妻も極まりが悪いだろう)」と(と惟光は)、思ひやり深く心しらひて(周到に気配りして)、*娘の弁といふ(少納言の娘の弁という若女房)を呼び出でて、　*「むすめのべん」は注に≪少納言の娘。≫とある。

「これ、忍びて参らせたまへ(そっと寝所に差し入れて下され)」とて、*香壷の筥(かうごのはこ)を一つ、さし入れたり(差し出しました)。　*「香壷」は香を薫き込めた物を入れておく香りつぼなので、香り箱。または化粧箱。其処に祝い餅が入っている。

「たしかに、御枕上に参らすべき(枕元に差し上げるべき)祝ひの物にはべる。あな、かしこ(くれぐれも宜しく)。あだにな(徒や疎かに為されませぬよう)」と言へば(と惟光がいえば)、「あやし(変なことを言う)」と思へど(と娘の弁は思ったが)、

「あだなることは(徒な遊びの色事など)、まだならはぬものを(私はしては居りませんのに)」とて(と戯れ言混じりで答えながら)、取れば(その箱を受け取れば)、

「まことに(いやいや)、今はさる文字(今はそうした戯れ言葉は)忌ませたまへよ(慎みなされよ)。よも混じりはべらじ(決して紛らわしい事の無い様に)」と言ふ(と惟光は言う)。

若き人にて(娘の弁は若い女房なので)、けしきもえ深く思ひ寄らねば(事情もよく察しかねていたが)、持て参りて(寝所に運んで)、御枕上の(おんまくらがみの、枕元の)御几帳よりさし入れたるを、君ぞ、例の(いつものような物知り顔で)聞こえ知らせたまふらむかし(姫に餅の由来なぞを教えて進づる様にして宥め付けたのでしょう)。

人はえ知らぬに(他の女房たちは知り得ない事だったが)、翌朝(つとめて)、この筥をまかでさせたまへるにぞ(源氏がこの箱を下げさせなさった時に)、親しき限りの人びと(側仕えの女房たちだけには)、思ひ合はすることどもありける(それが祝言の祝い餅だと気付く事が幾つか在ったのです)。

御皿どもなど(お皿類は)、いつのまにかし出でけむ(いつの間に用意されていたのでしょう)。花足(けそく、盛り皿は)いときよらにして(とても綺麗で)、餅のさまも(餅菓子の色形も)、ことさらびて(新婚三日夜の餅らしく白一色で)、いとをかしう(とても丁寧に)調へたり(ととのへたり、作られていました)。

少納言は、「いと、かうしもや(何と、このような)」とこそ思ひきこえさせつれ(と三日夜の餅から知るに至った)、あはれにかたじけなく(姫を正妻に迎える源氏の意向を身に染みて恭しく思い)、思しいたらぬことなき御心ばへを(幼い時から何年も育てながら改めて新婚の儀礼を心得た源氏の心配りに)、まづうち泣かれぬ(思わず涙しました)。

「さても(それにして)、うちうちにのたまはせよな(私たちにも内緒なんて)。かの人も(惟光さまも)、いかに思ひつらむ(どういうお考えなのかしら)」と(と側女房たちは)、*ささめきあへり(囁き合っていました)。　*こういう給湯室話めいた記述は男には感触が掴みにくい、とでも言いたくなるような語り口。詰まりは語り手と聞き手に共通の常識が分かりにくい、という事なのだろう。少納言の感激もこの女房たちの不満も、更には世間知らずの娘の弁に餅を差し入れさせた惟光も惟光を呼んだ源氏も、何かを知っていて其れが明示されていないから分かり難い。ただ分かり難いとは言え其の少ない言葉の中で、忌明け直後の婚儀と言う世間体の悪さとか、それでも立場上はある程度の式次第を整えなければ為らない少納言の立場とか、其れを全て呑み込んだ惟光の機転とか、が上手く説明されてはいた。また破瓜でも出血せずに薄い襞が拡がるだけの場合もあるらしいが、明らかに源氏と姫には二日前に性交の証があって当事者は当然だが、側仕えの女房たちの目にも明らかに其れと知れ、惟光にも知らされた事が、此処の記述から逆説的に語られている、とは言えるだろう。

かくて後は、内裏にも院にも、あからさまに(形ばかりの挨拶程度に)参りたまへるほどだに、静心なく(しずこころなく、そわそわと)、面影に恋しければ、「あやしの心や(妙な気分だ)」と、我ながら思さる。

通ひたまひし所々よりは(通い先の女たちからは)、うらめしげにおどろかしきこえたまひなどすれば(お通いが無いのを恨めしそうに言ってくる手紙があって)、いとほしと思すもあれど(気になり為さる女も居たが)、

新手枕(にいたまくら、新妻)の心苦しくて(を思うと胸が一杯になって)、「*夜をや隔てむ(一夜も離れられない)」と、思しわづらはるれば(いう思いに囚われるので)、いともの憂くて(とても沈みがちに)、悩ましげにのみもてなしたまひて(忌明け直後で未だ心の整理が付いていないよ

うな素振りで)、　*注に≪『奥入』は「若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てむ憎からなくに」（古今六帖一、夜隔てる）を指摘。≫とある。字面は「若く瑞々しい新妻を抱いてからは一晩たりと離れられない恋しくて」だろうし、「若草の」は単に「新手枕」に＜瑞々しい＞の意で掛かる枕詞だけでなく、姫を北山で見初めた時からの思いも込められるような気はする。この引歌を下敷きにした語り口という意味での「注」の指摘なのだろうが、それ以上に深い背景があるのかどうかまでは不明。

「世の中のいと憂くおぼゆるほど過ぐしてなむ(不幸の憂さが晴れてから)、人にも見えたてまつるべき(お会いする心算です)」とのみいらへたまひつつ(とだけ手紙でお応え為されて)、過ぐしたまふ(過ごされました)。

今后(いまぎさき、皇太后)は、*御匣殿(みくしげどの、後宮事務女官長になった右大臣家の六の姫君が)なほこの大将にのみ(未だに源氏にだけ)心つけたまへるを(心を寄せて御出でになる事に付いて)、　*「御匣殿」は≪内裏の貞観殿(じょうがんでん)の中にあり、内蔵寮で調進する以外の天皇の衣服などの裁縫をする所。≫とあり、また≪「御匣殿の別当」の略で御匣殿の女官の長で、上臈女房がなる。≫とある。なお「貞観殿」は≪平安京内裏十七殿の一。内裏中央の北端にあり、常寧殿の北に位置した。皇后宮の正庁で、後宮の事務をつかさどった。御匣殿(みくしげどの)。≫と大辞泉にある。

「げに(確かに)はた(今や)、かくやむごとなかりつる方も(正妻であられた左大臣家の姫も)失せたまひぬめるを(お亡くなりに為られたのだから)、さてもあらむに(源氏と夫婦になるのも)、などか口惜しからむ(悪い話しでもない)」など、大臣のたまふに(父君の右大臣が仰るのを)、「いと憎し(おお嫌だ)」と、思ひきこえたまひて(思って居らしたようで)、

「宮仕へも、長長しくだに(をさをさしくだに、長官としての重責を)しなしたまへらば(勤めて華やかにお暮らしになれば)、などか悪しからむ(少しも引けはとりますまい)」と、参らせたてまつらむことを(御所勤めを先ずは為さって)思しはげむ(他の宮との縁を待たれるようお勧めなさいました)。

君も、おしなべてのさまには(六の姫の魅力を並みとは)おぼえざりしを(お思いではなかったので)、口惜しとは思せど(残念な気はお有りだったが)、ただ今はことざまに(今の所は他の女に)分くる御心もなくて(心を配る隙もなくて)、

「何かは(何しろ)、かばかり短かめる世に(故姫のように短いかもしれない一生に)。かくて思ひ定まりなむ(このように一人に強く惹かれたのだから)。人の怨みも負ふまじかりけり(他の女に関って恨みを買うことの無い様にしないと)」と、いとど危ふく思し懲りにたり(よほど御息所の怨霊に懲りていらしたようでした)。

「かの御息所は、いといとほしけれど(とても才気が惜しまれるけれど)、まことのよるべと(正妻として)頼みきこえむには(頼りにするには)、かならず心おかれぬべし(きっと打ち解け合え無いだろう)。年ごろのやうにて(今までのような遊び相手で)見過ぐしたまはば(我慢してくださるなら)、さるべき折ふしに(時折に)もの聞こえあはする人にてはあらむ(風情を楽しみ合える人ではあるのだが)」など、さすがに(あれ程の事が合っても)、ことのほかには(特には)思し放たず(縁切りを御考えになる事は有りませんでした)。

「この姫君を(正妻に迎えようとしている西の対の姫君を)、今まで世人も(よひとも、世間の人も)その人とも知りきこえぬも(素姓を知らないと言うのも)、物げなきやうなり(形の整えようが無い有様だ)。父宮に知らせきこえてむ(先ずは姫の実父である兵部卿宮にお知らせ申して置かねばなるまい)」と(と源氏は)、思ほしなりて(御思いになって)、

御裳着(おんもぎ、女子成人式)のこと、人にあまねくは(世間に広くは)のたまはねど(お知らせになら無いが)、なべてならぬさまに(並々ならず立派にと)思しまうくる(思い遣りなさる)御用意など、いとありがたけれど(大変勿体無かったが)、女君は、こよなう疎みきこえたまひて(本当に嫌がって御出での様で)、

「年ごろよろづに頼みきこえて(数年来全てを御頼り申して)、まつはしきこえけるこそ(お側に纏い付き申した事こそ)、あさましき心なりけれ(浅はかでした)」と、悔しうのみ思して、さやかにも(はっきりと目を)見合はせたてまつりたまはず(見合わせ為さる事無く)、聞こえ戯れたまふも(源氏が冗談を言いなさっても)、苦しう(嫌味な)わりなきものに(つまらない話と)思しむすぼほれて(思い頑なになって)、ありしにもあらずなりたまへる(以前の屈託の無さがまるで見られない)御ありさまを(姫のお姿を)、をかしうもいとほしうも思されて(源氏は可笑しくも可愛くも御思いになって)、

「年ごろ(数年来)、思ひきこえし本意なく(可愛がってきた甲斐も無く)、馴れはまさらぬ御けしきの(一向に打ち解けて下さらぬ様子の)、心憂きこと(遣る瀬無い事)」と、怨みきこえたまふほどに(恨み言を仰っている内に)、年も返りぬ(年も明けました)。

[第三段　新年の参賀と左大臣邸へ挨拶回り]

朔日(ついたち、元日)の日は、*例の(例年通り)、院に参りたまひてぞ(院に参賀なさってから)、内裏、春宮などにも参りたまふ。　*喪中謹慎については「妻の服喪は三ケ月。源氏は昨年十一月半ばに除服している。」との事。

それより大殿にまかでたまへり(東宮御所から左大臣邸へ出向かれました)。大臣、新しき年ともいはず(新年の祝いもせず)、昔の御ことども聞こえ出でたまひて(故姫の思い出話を為されては)、さうざうしく悲しと思すに(寂しく悲しいと御思いの所に)、いとどかくさへ渡りたまへるにつけて(ますますこうして源氏が参賀で訪ねなさると)、念じ返したまへど(気を取り直して応対し様と為さるが)、堪へがたう思したり(堪え難くお思いのようでした)。

御年の加はるけにや(源氏は一つ御歳を取られた所為か)、ものものしきけ(重々しさ)さへ添ひたまひて(さえ加わって)、ありしよりけに(前にも増して)、きよらに見えたまふ(立派に見えなさります)。立ち出でて(大臣の前を辞して)、御方に入りたまへれば(以前暮らした故姫の部屋にお入りになると)、人びともめづらしう見たてまつりて(女房たちも久しぶりに殿を拝し申しては)、忍びあへず(悲しみを隠し切れません)。

若君見たてまつりたまへば(若宮を拝しなさると)、こよなうおよすけて(大きく成長なさって)、笑ひがちにおはするも(にこにこしていらっしゃるのが)、あはれなり(可愛らしい)。まみ、口つ

き、ただ春宮の御同じさまなれば(ただ、目元口元がまるで東宮そっくりなので)、「人もこそ見たてまつりとがむれ(二人を見比べる人が居たら怪しむかもしれない)」と見たまふ(と御思いになるのでした)。

御しつらひなども変はらず(部屋の新年飾りも変わりなく)、御衣掛の(みぞかけ、衣紋掛の)御装束など(源氏の御着物なども)、例のやうにし掛けられたるに(例年通りに新調されて掛けられていたが)、女のが並ばぬこそ(女物が無いのが)、栄なくさうざうしけれ(地味で物悲しかった)。

宮の御消息にて(母宮からの御伝言で)、「今日は、いみじく思ひたまへ(新年なので特別な日と心得て)忍ぶるを(悲しみを抑えておりましたが)、かく渡らせたまへるになむ(こうして大将殿がお見えになると)、なかなか(どうしても故姫が偲ばれて、つい涙してしまいます)」など聞こえたまひて(などと申し為されて)、

「昔にならひはべりにける(昔の習い通りに春用に新調した)御よそひも(お召し物も)、月ごろは(この数ヶ月は)、いとど涙に霧りふたがりて(ひどく涙目で上手く誂える事が出来なかったので)、色あひなく御覧ぜられ(色合いが新年に相応しくないと御思いに為られて)はべらむと思ひたまふれど(しまうかと案じられますが)、今日ばかりは、なほやつれさせたまへ(敢えて身窄らしくても供養としてお召しになって下さいませ)」

とて、いみじく(非常に)し尽くしたまへるものども(丹念に作りこまれた衣服類を)、また重ねてたてまつれたまへり(掛けられていた正装の一揃いの他に差し出し為されました)。かならず今日たてまつるべき(この元日の日にこそ相応しい)、と思しける御下襲は(と思われる背長内着は)、色も織りざまも、世の常ならず、心ことなるを(格別の思い入れで調えなさった)、かひなくやはとて(甲斐を無くさせては申し訳ないと)、着替へたまふ(源氏は着替えなさいます)。

来ざらましかば(もし自分が新年の挨拶に来なかったら)、口惜しう思さましと(さぞ残念に御思いに為っただろうと)、心苦し(源氏は左大臣家の厚遇が忝かった)。御返りに(そして母宮への御返事として源氏は)、

「*春や来ぬるとも(春の訪れを知らせる鶯の様に)、まづ御覧ぜられになむ(先ず御覧頂こうと)、参りはべりつれど(参ったのですが)、思ひたまへ出でらるること多くて(思い出される故姫の事が多くて)、え聞こえさせはべらず(上手く御挨拶出来ません)。　*「春や来ぬる(はるやきぬる)」について＜『源氏釈』は「新しく明くる今年を百年の春や来ぬると鶯ぞ鳴く」（古今六帖一--一六）を指摘。＞とある。

あまた年今日改めし色衣、きては涙ぞふる心地する　(和歌 9-23)

新ためて着る祝い着に、改めて知る懐かしさ　(意訳 9-23)

*注に≪源氏の贈歌。「きて」は「来て」と「着て」、「ふる」は「降る」と「古る」との掛詞。≫とある。「来て」は「あまた年」を受けて、「着て」は「今日改めし色衣」を受ける。したがって訳文の≪何年来も元日毎に参っては着替えをしてきた晴着だが、それを着ると今日は涙がこぼれる思いがする≫とある後節を、「今日はその晴れがましさが却って昔を偲ばせて涙がこぼれる思いがする」と上塗りしたい。

えこそ思ひたまへしづめね(とても鎮め切れない思いです)」と聞こえたまへり(と申し上げました)。御返り(そして母宮からの御返歌はこう有りました)、

「新しき年ともいはずふるものは、ふりぬる人の涙なりけり」(和歌 9-24)

「新たまる年を重ねると、涙の嵩もあら溜まる」(意訳 9-24)

*注に≪大宮の返歌。贈歌中の「年」「涙」「ふる」の語句を用いて返す。「ふる」に「降る」と「古る」とを掛ける。≫とある。そして訳文は≪新年になったとは申しても降りそそぐものは、老母の涙でございます≫とある。

おろかなるべきことにぞあらぬや(娘を亡くした母の悲しみはとても疎かに出来る事などではなかったのでしょう)。

(２００９年５月１１日、読了)